



(財) 日本野鳥の会

新潟県支部報

84年1月15日 No.16

日本野鳥の会新潟県支部
(事務局)

〒950-21

新潟市五十嵐3の町
9753-26 石部 久

電話 0252 (61) 1416

振替 新潟 1-6002

私のフィールド

清津川上流

鹿飛橋栄太郎峠

国立公園指定地域内でさえも、開発が進み各地で無残な姿を見せているが、これから紹介する地は、交通の便がよいわりに、まだ原始自然が残されているところである。

清津峡といえば、柱状節理を削って流れる中魚沼郡の清津峡温泉付近が圧巻だが、私のフィールドは、そこからさらに上流部にそびえる大峰山から出発し、栄太郎峠、清津峡避難小屋跡を経て、鹿飛橋から八木沢まで清津川を溯上するコースである。

大峰山へは、湯沢の温泉街からロープウェイで一気に登ることができる。この付近は、ブナの純林で、下層のネマガリダケのやぶ、足元からコルリの声がよく聞ける。またマミジロ、ジュウイチ、アカハラなど低地にいない野鳥が、得意ののどを、披露してくれる。

大峰山頂の展望台から清津川までの道は、人影もまばらで、ブナとトチの巨樹が織りなす造形美を、ぞんぶんに楽しむことができる。

せせらぎの音が次第に大きくなると、谷の静寂を破って、オオルリ、ミソサザイの囀りが競いあうようになる。紅葉のみごとな秋には、ゴジュウカラが樹幹をチョコチョコ動きまわって、人の動きを偵察しに集まってくる。

避難小屋まで下りると、鳥の声は、しばしば清津の流れにかき消されてしまうが、この付近で聞いたアカショウビンの声は、岩壁に



南魚沼郡塩沢町 木下 弘

しみこむように響きわたって忘れられない。

鹿飛橋から直下に、清津川本流をのぞきこんでキモを冷した後、台風で倒木したブナの大木をまたぎ、トチ、ナラ、カツラなどうっそうとしげる原生林の中を約一時間進む。と急に視野が開け、ホオジロの声が激しくなってくる。すぐに八木沢部落、そして国道17号線である。

このフィールドも、近くダムの下に水没してしまうとか。惜しまれて、仕方がない。

形態と行動は一枚岩

上越教育大学

中村登流

くちばしの形と計測のこと

鳥のくちばしの形は、哺乳類の歯や昆虫類の口器のように、種や系統グループごとに独特のものがある。すべての動物の形と同じように、鳥の形、全体も部分もともに、一つ一つに生存上の意味が含まれている。なかでもくちばしの形はそれぞれの種の採食行動と結びついているので、種の生存にかかわる二大原理、種族維持と個体維持の後者を端的に見わしている。そのため、くちばしの形によって鳥の生活形を示すことができる。

私が鳥のくちばしの形に興味を持ったのはシジュウカラ科の鳥の採食行動を比べるためだった。この科の鳥は混群をつくって同じ林の中をにぎやかに動きまわりつつ餌を求めている。同じ林の中に違う種がいっしょに餌をあさることの不思議さに引かれて、野外観察上、十分に区別できないほど似ているくちばしの形を、もう少しくわしく比べてみようと思った。

くちばしの長さは大抵の図鑑にも出ていて比べやすいのだが、大きい鳥は大きいくちばし、小さい鳥では小さいくちばしだということはあたりまえすぎる。大きいくちばしのもは、大きい餌を食うことができる。コサギが少し大きすぎるコイをつかまえて、何とか飲みこもうと、何回も試みたが、とうとう飲みこむことができずに、放棄したのを見たことがある。一般には、大きいくちばしは、大きいものを食べられるだけでなく、小さいものも食べられるので、食べられる大きさの幅が広いとされている。イギリスでシジュウカラとアオガラやヒガラなどのカラ類の食物を比べ、シジュウカラがもっとも大きいものを食い、かつ幅広い範囲を食うことを証明した論文がある。しかし、それだけのことで大き

さが決まるのだろうか。大きい体は小さい食物で維持しようとするれば、それだけ数多く食わねばならないし、1つ食うためにほぼ同じようなエネルギーを消費しなければならない。はたしてそれで、大きい体が維持できるものなのか。

大きさを比べる場合、体の大きさに対する大きさを比べることが必要のように思える。絶対的な大きさというのは、ただ1個体とかただ1種だけをとあげた場合に、人為的に見えてくるが、それは人がそうしてしまっているきらいがある。自然界にはそんなものはないのだし、それでは大きさそのものも認識できない。常に、人が決めた何か或る基準に比べて大きさがある。1つの種類が大きいのは他の種類に比べて大きい。いや、進化の原理は、比べて大きさを維持している。実在そのものが相対的なのだ。

そこで、くちばしの大きさは体長とか体重の立方根に対する比の値として相対値をつくらせて比べることになる。しかし、鳥の体長とか体重はあまりあてにならない変異性がある。鳥の体の中で比較の変異の少ないのは頭骨長であるという論文がある。頭骨長の代りに頭長を使ってはどうだろうか、私はそれを基準にくちばしの大きさの相対長を表わすことにした。しかし、長さを測ることのむずかしさそれを計測する計測点の位置の決めかたや、計測行為そのものの疑点や、形を表現するのに長さはあまりにも大きすぎる、といった問題に、すぐに行きあたってしまう。頭やくちばしとノギスの位置関係を定め、常にそれを同じ条件にするよう努力し、一定のノギスを使ったり、計測は自分以外にまかせないようにする。そして、くちばしの形を三角形にみだてて、長さだけでなく、幅と厚さを測

るようにしてみた。それぞれの比の値によって、とんがり度とか、上下の平べったさとか左右の平べったさなどを表現してみる。しかし結局は上くちばしの稜の丸味とか、上くちばし外縁の三次元的な曲りかたなどは表現できずじまいにおわった。

カラ類のくちばしの形と採食行動

くちばしの形の特徴をほり出してみると、こんどは採食行動の野外観察の不足がやりきれなくなってくる。もう一度見なおして、もろもろの行動の出現率（観察率）を出す。特にくちばしを実際に使っている場面となるとなかなか観察数がのびない。それでも年数を重ねるうちに、ぼつぼつと分かってきた。

ヒガラのくちばしは細長い。そしてそれは針葉樹林での採食行動に適応したものだとはかなり古い論文がある。たしかにヒガラのくちばしのとんがり度は他のカラ類に比べて群を抜いている。細長い形なのだ。針葉樹のもつ、細い葉の間とか、樹皮の割れ目とか、鋭角的な小枝の股の所など、小さいすき間から虫をとり出す適応形だとされた。たしかにヒガラの採食行動、特にくちばしの使い方にはそういうのが多い。それだけではなく、ヒガラ独自の使いかたに、木の芽をずぶりとつきさして、中にいる虫をとり出したり、若いまつかさに入っている虫をほじり出すやりかたがある。さぐり針にも似た細長いピンセットがヒガラのくちばしに当る。

くちばしの形と行動の結びつきで、もっとも驚いたのは、コガラだった。コガラのくちばしは、相対長には特徴が出てこないし、他のカラ類と同じ計測点を設定する限り独自性のはっきりしない。少なくとも他のカラ類に比べて、左右方向に扁平になる傾向があった。それも、くちばしの元の方より、もう少し前方で急に左右方向に圧縮される。それは材に幅狭い溝をはる「のみ」に似ている。上下方向に厚みがあって、急に先がとがっているから、これですつくと、くちばしの先で上下方向に大きい出力を得るはずだ。しかし行動の記録に、これを説明する記録がなかった。少なくとも、コガラは枯れ枝や樹木の枯死部でさ

かんにくちばしを使うことが分かっていた。ところが、或る寒い日のこと、ウツギ類らしい藪の中で、小枝にとまったコガラが、その細い小枝に小枝の縦軸方向に沿って正確にくちばしを打ちこんでいるのを見つけた。このため、下くちばし側へ材がめくれかえってくる。そして材の中から小さい虫をとり出して食っている。少し進んで同じことをくりかえすので、枯れ小枝はめくれあがった材のため毛ば立った感じに変形した。こういう小枝が藪の中にいっぱいあることが分かった。コガラは枯死材を打ちたたいて、破壊して虫をとり出す適応として、左右に扁平なくちばしを造り出したのだ。

奇妙に思ったのはシジュウカラである。相対長にしても、とんがり度にしても、左右方向と、上方方向の平べったさについても、他のカラ類に抜きん出た独自性が無い。すべてまん中で、中庸であり凡庸であった。あらためて、つくづくとくちばしを眺めた。まことに平凡な、少し丸味のある円錐形を見ている内に、シジュウカラには特徴のないという特徴があるように思えてきた。採食行動がそれを裏づけている。シジュウカラは林内では地上にすごしがちである。落葉をひっかきまわし、一枚一枚めくりかえしては、落ちていたものを探していく。それだけではなく、まわりにいる同種はもちろん、別のカラ類にも強い関心を持っていて、近づいたり、食っている場所から追いはらって横どりをする。拾い屋で、何でも屋で、ものまね屋なのだ。そういえば林縁の生活に強く、二次林にさかえ、人家へも接近してくる適応力の強さ、幅の広さを持っている。

こうして形と行動の一致点を求めている内に、いく分鳥の世界へ、もう一步ふみ込んだという感じがして来る。今ではすべての鳥のくちばしの使いかたに興味を持っている。



飯豊連峰の鳥相 (予報)

渡 部 通

1. はじめに

東北地方でも数少ない野生動物の生息地として知られている飯豊連峰は新潟、山形、福島の三県境に位置している。標高1600~2000m級の一大山塊は、総面積が43000haでそのうち特別保護地区は7300haとなっている。

飯豊連峰の特徴はいろいろあるが、一般的なのが日本海側気候区北陸型の気象条件下にあって、夏季のフェーン現象と冬季は想像を越える降雪が顕著であること、亜高山性針葉樹林を欠いていること等があげられる(図1)



(図1) 飯豊連峰景観の一例

ところで、飯豊連峰における鳥類の調査研究については、これまで千葉¹⁾、加藤²⁾、高橋⁴⁾などによって調査されているが、生息状況、密度、繁殖状況等については未解明の部分が多いようにうかがえる。又、近年自然環境の悪化に伴ない野生動物への影響が懸念されている。筆者らは、飯豊連峰の主として新潟県側における山域で生息鳥類の分布状況を調査しているがここでは鳥相の一部を報告し今後に資することとしたい。

2. 調査地及び調査方法

調査地域は冬季降雪量が多く厳しい環境となる。地質構造的には、古成層花崗岩質を主とし、地形は複雑である。植生はおおむね、

コナラ、クリなどが占める二次林域が、海拔500m付近まで続き、500~1200mではブナ林が優占し、順次高度が増すにつれチシマザサ、ハイマツ等を中心とした灌木帯に移行する。調査は飯豊連峰の鳥相を一層明確にすることを重点に考え、三コースを選び実施した。すなわち実川登山口から牛首山(1982m)を経て大日岳(2128m)に向う「実川ルート」、胎内ヒュッテより大石山(1560m)を経て門内岳(1880m)に進む「胎内ルート」、湯の平温泉から北股岳(2025m)に向う「赤谷ルート」である。調査方法は、調査幅を50mとして出現する鳥類の鳴声、地鳴、飛翔、目撃等により種を判定するロードサイドセンサス法を採用した。

3. 調査結果及び考察

これまでの調査で観察された鳥類は13目35科84種であった(表1)。これを種類数の高い順に整理すると、スズメ目56種(67%)と最も多く次いでワシタカ目7種(8%)、ホトトギス目とキツツキ目4種(5%)、その他20%の内訳になる。これら記録された種のほとんどは調査地の生息環境を形造っている樹木や草地等の植生を反映した種で大半が樹鳥類で占められていた。このうち、カイツブリ、アオサギ、ハイタカ、イヌワシ、アオバト、コノハズク、オオアカゲラ、ジョウビタキ、ノビタキ、クロツグミ、ツグミ、コメボソムシクイ、エゾムシクイ、サメビタキ、キバシリ、カシラダカ、アトリの17種は新しく飯豊連峰の鳥相に追加されるものである。これらの中で、ブナ林及び深山帯に生息するコノハズク、オオアカゲラ、キバシリは少数ながら繁殖も予想される。ジョウビタキ、ノビタキ、

(表1.) 飯豊連峰の鳥類目録

| 目 | 科 | 種名 | 目 | 科 | 種名 |
|--------|------------|-------------------------|-----|-----------------|---|
| カイツブリ | カイツブリ | 1 カイツブリ | スズメ | ヒタキ (ツグミ亜科) | 41 コマドリ |
| コウノトリ | サギ | 2 アオサギ | | | 42 コルリ |
| ガンカモ | ガンカモ | 3 カルガモ | | | 43 ルリビタキ |
| ワシタカ | ワシタカ | 4 トビ | | | 44 ジョウビタキ |
| | | 5 オオタカ | | | 45 ノビタキ |
| | | 6 ハイタカ | | | 46 トラツグミ |
| | | 7 ノスリ | | | 47 マミジロ |
| | | 8 サシバ | | | 48 クロツグミ |
| | | 9 クマタカ | | | 49 ツグミ |
| | | 10 イヌワシ | | | 50 アカハラ |
| キジ | キジ | 11 ヤマドリ | | ヒタキ (ウグイス亜科) | 51 ヤブサメ |
| ハト | ハト | 12 キジバト | | | 52 ウグイス |
| | | 13 アオバト | | | 53 コメボソムシクイ |
| ホトトギス | ホトトギス | 14 ジュウイチ | | | 54 メボソムシクイ |
| | | 15 カッコウ | | | 55 エゾムシクイ |
| | | 16 ツツドリ | | | 56 センダイムシクイ |
| | | 17 ホトトギス | | | 57 キクイタダキ |
| フクロウ | フクロウ | 18 コノハズク | | ヒタキ (ヒタキ亜科) | 58 キビタキ |
| ヨタカ | ヨタカ | 19 ヨタカ | | | 59 オオルリ |
| アマツバメ | アマツバメ | 20 ハリオアマツバメ 21 アマツバメ | | | 60 サメビタキ 61 コサメビタキ |
| ブッポウソウ | カワセミ | 22 ヤマセミ 23 アカジョウビン | | ヒタキ(カササキビタキ亜科) | 62 サンコウチョウ |
| | ブッポウソウ | 24 ブッポウソウ | | | エナガ |
| キツツキ | キツツキ | 25 アオゲラ | | シジュウカラ | 64 コガラ |
| | | 26 アカゲラ | | | 65 ヒガラ |
| | | 27 オオアカゲラ | | | 66 ヤマガラ |
| | | 28 コゲラ | | | 67 シジュウカラ |
| スズメ | ツバメ | 29 ツバメ 30 イワツバメ | | ゴジュウカラ | 68 ゴジュウカラ |
| | | セキレイ | | 31 キセキレイ | キバシリ |
| | 32 セグロセキレイ | | | メジロ | 70 メジロ |
| | 33 ビンズイ | | | ホオジロ | 71 ホオジロ 72 カシラダカ 73 ノジコ 74 クロジ |
| | サバジョウクイ | 34 サンジョウクイ | | アトリ | 75 アトリ |
| | ヒヨドリ | 35 ヒヨドリ | | | 76 カワラヒワ 77 ウソ <small>セ?イ? = 32</small> 78 イカル <small>5-X</small> |
| | モズ | 36 モズ | | ハタオリドリ | 79 スズメ |
| | カワガラス | 37 カワガラス | | ムクドリ | 80 ムクドリ |
| | ミソサザイ | 38 ミソサザイ | | カラス | 81 カケス |
| | イワヒバリ | 39 イワヒバリ | | | 82 ホシガラス |
| | | 40 カヤクグリ | | | 83 ハシボソガラス |
| | | | | | 84 ハシブトガラス |
| | | | | Total 13 目 | 33 科 |

ツグミ、サメビタキ、アトリは秋季に観察されたが、特にサメビタキはこれまで夏季における観察例がなく、今回の記録は本山塊における夏季の生息を裏づけるものとして意義深い。ジョウビタキ、ツグミ、アトリは冬鳥として普通である。又、既存文献から飯豊連峰では稀な種として、コマドリ、コルリ、キクイタダキ、ルリビタキ及びサメビタキが上げられるが、コマドリについては「実川ルート」で3個体を、コルリはそれぞれのルートで5~7個体を記録することができた。いずれもブナ帯上部の狭い範囲を生息域としており、本山塊における両者の垂直分布域がほぼ、一定した海拔高であることが推測できた。キクイタダキは高橋⁴⁾が、ルリビタキは加藤²⁾が観察しているがいずれも数個体であるのに対し、秋季の調査では割合多く目に触れた。

またワシタカ目ではオオタカ、ハイタカ、ノスリ、サンバ、クマタカ、イヌワシの6種が観察されたが、猛禽類は食物連鎖の最高位に位置し、個体数が少ない種とされている。特に近年、全国的に減少化が指摘されている折、比較的多く目撃されたことは注目できる。繁殖状況については、調査期間中巣卵や雛又は幼鳥、親鳥の行動といった要因などから繁殖が確認された種はスズメ目が主で24種を記録した。まず巣卵の発見と育雛を観察した種として、ホオジロ、センダイムシクイ、キセキレイ、オオルリが上げられ、幼鳥、亜成長によった種は、ヤマドリ、コゲラ、ツバメ、ビンズイ、ヒヨドリ、カワガラス、カヤクグリ、クロツグミ、メボソ、コサメビタキ、コガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、イカル、イワツバメ、ムクドリ、スズメ、ブッポウソウ、そしてイヌワシで計20種であった。このうちイヌワシは国から特殊鳥類の指定を受けている種で、繁殖地それ自体が天然記念物の扱いを受ける重要稀産種である。本種は、豊富な野生動物が生息する天然林や二次林、開けた場所など多様性に富んだ自然環

境を生息地としており⁵⁾、今後生息地を含めた行動圏全域の環境を保全することが最も重要であると考えられる。さらに本種の分布状況、繁殖、生息数など不明の点も多くあり、今後精査を重ねたい。又、調査期間外ではあるが福島県側のブナ林で、クロジの繁殖を確認した⁵⁾が本種については、加藤³⁾の詳細な報文がある。

記録できた鳥類のすべてを調査地を基準とした季節的な移動、すなわち渡り区分によって類別すると、留鳥30種(36%)、夏鳥24種(28%)、漂鳥19種(23%)、冬鳥6種(7%)、旅鳥5種(6%)となり、留鳥並びに夏鳥が全体の半数を占めていた。

4. 結 び

以上、飯豊連峰における鳥相の一部を報告したが、そのうち17種は、新しく加えられるものである。特にイヌワシの家族群の発見は前例のない記録できわめて貴重と思われる。

深山帯に生息する稀少種で、キバシリ、オオアカゲラ、コノハズクを、さらに飯豊連峰では数少ない種であるコマドリ、コルリの分布状況を記録した。今後も調査を重ねたい。

5. 引用文献

- 1) 千葉 晃 1972. 夏期における飯豊連峰の鳥類. 飯豊山塊, 胎内溪谷の生物分冊.
- 2) 加藤忠一 1970. 飯豊山(磐梯朝日国立公園)の鳥類. 鳥, 20(88), 1-7.
- 3) 加藤忠一 1983. 上川村大久蔵におけるクロジ *Emberiza Varibialis* TEMMINCK の記録. 四季のつどい, 8, 2-5.
- 7) 日本鳥学会 1974. 日本鳥類目録改訂第5版. 学習研究社.
- 6) 日本野鳥の会 1983. 昭和57年度特殊鳥類調査.
- 4) 高橋多蔵 1970. 飯豊連峰の動物相一鳥類. 飯豊連峰総合学術調査報告書(山形県), 117-162.
- 5) 渡部 通 1979. 飯豊連峰におけるクロジの観察. 野鳥, 394, 303.

新潟空港(阿賀野川河口沿岸)で繁殖する オオジュリン

千葉 晃

I はじめに

本県でオオジュリンの生息が確認されたのは、昭和32年のことである。稀な冬鳥と考えられていた本種は、その後柏崎市悪田、新潟市郊外、豊栄市福島潟などで標準調査が行われた結果、毎年おびただしい数が県下の沿岸部を通過して本邦西南部まで渡り、一部は県内各地の低湿地で越冬することが明らかになった。ユーラシア大陸の周北極地方に広く分布する本種は多型種で15亜種から成り、本邦産の *Emberiza shoeniclus pyrrhulina* (Swinhoe) は、主として北海道で繁殖すると考えられてきたが、最近10年の間に、青森県(岩木川河川敷、高瀬川河口)や秋田県(八郎潟干拓地)でも繁殖することがあいついで報告された。

私は、たびたび探鳥に出かける阿賀野川河口沿岸のヨシ原で、1981年以来毎年生殖羽(夏羽)の雄成鳥と雌が越冬していることをつきとめ、繁殖している事実をほぼ確認できた。ここにその概要を報告する。

II 繁殖地とその環境

本種の生息が確認されたヨシ原は、阿賀野川の左岸に隣接する新潟空港の東端に位置している(図-1)。このヨシ原は長さ約400m、最大

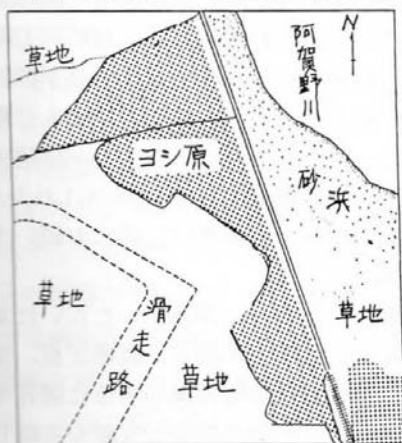


図-1 オオジュリンが越冬した新潟空港東隣の平面図と環境区分

幅員約200mで、主として高さ1.5~2.0mのヨシ原から成り、一部にガマやマコモを混じて池沼状を呈する箇所がある。ヨシ原の西側は開放的な丈の低い草地に隣接し、そこには滑走路が伸びている。一方、東側は車道を隔てて堤防の草地、河口の砂州へと連なっており、さらに、北側は草地を経て海岸(砂浜)へと続いている。

III 繁殖状況

本種の生息を確認したのは1981年7月18日の夕方、まったく偶然のことであった。この日以来1983年の夏まで、毎シーズン本種はこのヨシ原を訪れ、越冬したのである。この間に観察した事柄はきわめて乏しく、かつ断片的であるが、表-1のようにまとめられる。

1981年の場合、生殖羽の雄が少なくとも2個体生息し、一定のさえずり地域を有していたこと、雄の羽が巣材と思われる枯草を運んだこと、雌一羽が餌をくわえて飛び、これに続いて幼鳥と推定される雌型の個体が追尾したことなどは、繁殖を裏付ける事実として注目される。1982年は、前年より観察時間が少なく、その内容も乏しかったが、6月5日にさえずっている雄成鳥が目撃され、すでに繁殖生活に入っていることが推定された。さらに、同年7月18日に

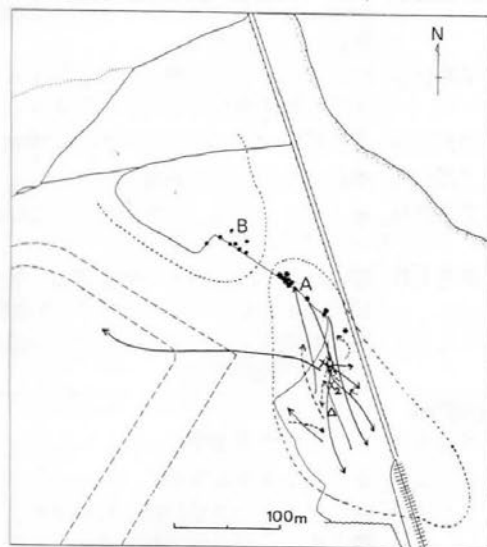


図-2 オオジュリンの行動圏と、ソングポストを示す略図。点線は雄Aと雄Bの推定行動圏、黒丸はソングポスト、実線矢印は雄A、点線矢印は雌の移動方向を示す。
△の説明は本文参照のこと。(1981年7月25、26日、8月1日の延べ8時間の観察をプロットしたもの)。

は雄成鳥3羽が同時に観察され、交尾行動も確認できた。1983年は、観察に費した時間はほとんどなかったが、6月26日には雄成鳥3羽が同時に観察され、前年と同数の雄の生息が認められた。このうちの2羽は、1981～1982年とほぼ同地域にソングポストを持っており、繁殖期におけるこのヨシ原での分布（正確にはさえずり地域）が年によってあまり変化しないことが窺われた。

さえずり活動： 観察期間中、雄はかなり狭い範囲（1981年雄Aの場合は約700㎡）でさえずり、さえずり活動は早朝から夕方日没の近くまで続いた（図-2）。ソングポストは西側の草地と隣接するヨシ原の辺縁に集中

表-1 阿賀野川河口沿岸における
オオジュリンの生息状況

| 観察年月日 | 観 察 内 容 |
|----------------|---|
| 1981年 7月18日 | オオジュリンの成鳥雌雄各1羽を新潟空港内のヨシ原で確認する。雄1羽はヨシ原の縁でさえずる。 |
| 7月19日 | 雄1羽さえずる。雌1羽が昆虫の幼虫をくわえてヨシ原へ入る。これを巣立幼鳥と思われる雌型の鳥2羽が追尾する。 |
| 7月20日 | 雄1羽さえずる。巣材を加えて南側へ飛ぶ。別の雄1羽（アルミニウムの足環付）がさえずる。 |
| 7月21日 | 雄2羽がヨシ原に飛来してきたモズを追う。雌1羽が餌をくわえて運ぶ。 |
| 7月22日 | 雄2羽さえずる（両者間距離は約10m）。 |
| 7月24日 | 雌成鳥各1羽を観察する。 |
| 7月26日 | 雄1羽さえずる。堤防を隔てた川岸のヨシ原から地鳴を聴く。 |
| 8月1日 | 雄1羽さえずる。雌1羽餌を運ぶ。巣立幼鳥と思われる雌型の個体2羽を観察。 |
| 8月16日 | 雌型の個体2羽が堤防を隔てた川岸のヨシ原で採餌する。 |
| 1982年 6月5日 | 雄成鳥1羽さえずる。 |
| 6月20日 | 雄成鳥1羽さえずる。 |
| 6月27日 | 雄成長2羽の追尾行動を観察する。雌1羽ヨシ原の縁で採餌する。 |
| 7月18日 | 雌雄3羽同時観察。交尾行動確認。 |
| 1983年 6月26日 | 雌雄3羽同時観察（2羽はヨシ原の縁でさえずり、他の1羽はヨシ原から飛び出て草地の上を飛ぶ）。 |

しており、鳥はヨシの桿茎に側方からとまってさえずりを行った。ソングポストにとまる時間は、2～12分（平均5.4分）であった。

雄の行動： 一日中、ソングポストにいる間、雄はさえずりのほか、警戒、休息、整羽などを行ったが、しばしばソングポストを離れてヨシ原の中で過ごした。しかし、その詳細は不明である。1981年雄Aの飛翔（移動）方向を追跡したところ、北側のヨシ原（雄Bの行動圏の中心がある）にはあまり飛来せず、南側のヨシ原に出現が集中することがわかった。（図-2）。この地域には雄Bが飛来してくることはほとんどなく、わかって番相手と思われる雌の出現が目立った。図-2の×印で示した地点は、これら成長雌雄が接近して認められた場所で、×₁は雌雄間の距離が3cm、×₂は20cmである。雌雄の出現が目立った南側のヨシ原は、この番の行動圏の中心部をなすものと判断され、×印のごく近くに営巣していた可能性が高い。

雌の行動： 1981年の場合、雄Aの番相手と思われる雌は主として南側のヨシ原内に出現したが、目撃の機会は雄に比べて少なかった。図-2の△印は雌および幼鳥と推定される個体がほぼ同時に出現した場所である。

IV おわりに

1980年以来、私はしばしば阿賀野川河口に出かけ、コアジサシの繁殖状況を観察してきたが、思いがけずオオジュリンの越夏例を観察する機会に恵まれた。上述したとおり、本種はごく少数ながら新潟空港の一面に定着し、繁殖している模様である。ほぼ同じ頃、福島潟では巣立ち間もない本種幼鳥が標識放鳥されており、さえずり中の雄成鳥も目撃されている。注意するとオオジュリンは越後平野のあちこちで繁殖しているのかもしれない。会員諸氏の観察と情報提供を切にお願いする次第である。

稿を終えるに当たり、御教示いただいた本間隆平、風間辰夫、白井康夫、高橋正良、常山秀夫、小林吉蔵、高橋秀恵の各位に御礼申し上げます。なお、紙面の都合で文献を省略したことをおことわりする。

第3回指導員養成 講座に参加して

渡 辺 範 雄

どんな講座内容なのかは既に支部報No. 13, 15に詳しく紹介されているので、私は印象に残ったことを記してみたい。

◎最近の都会の子供は自然教育園(目黒)につれていっても、鳥に対してほとんど興味を示さない。又夏期校を浅間高原にもつ恵まれた学校の生徒にこんなこともある。「鬼押し」を見学して帰路、カラ松の林間でお昼の食事をとることになった。47名の生徒の中30名が立ったまま食事をとったという。傍らに木株もあり坐るに格好な場所だというのに。

自然との隔離が進んで生活環境が変わってしまっ、このようなことは子供だけでなく成人の間にも増えてきている。これは「環境教育と探鳥会」について語った講師の話の一部である。聞いていた私にとっては信じられないショックであった。

◎3日目各班別に早朝神宮境内で探鳥会実技が行われた。終了後の反省会の時である。

リーダーをやらされた東北の若い青年の訴えは今も鮮やかに思い出される。「略…初めから何となく違和感を感じた。探鳥会は都市型になっている。田舎では山へゆこうと云えば山菜取りが目的で、自然観察などはずっと下のことだ。新聞にのせても市民探鳥会に来ない。鳥はとり立てて見る対象ではない。草原川原は運動公園と変り人は鳥が減ったとは思っていない。古最上の自然保護区活動をいろいろやっており、この状況を新聞にのせてもあとの反響がない。どうやって初心者に鳥に対する興味を持たせるか、都会中心の講座に違和感を感じたが、支部へ帰ったら自分なりにやってゆく積りである。……」会場は静まりかえった。若い人が自然保護活動に情熱を燃やしているのを知って頼もしく感じた。

◎野鳥の会の沿革について語られた講話の中での第1回探鳥会の経過は興味があった。中西会長の着眼のよさは、若しも中西会長が野鳥の会誌だけを発行し探鳥会を計画しなかったとしたら、日本野鳥の会の今日の隆盛はなかったであろうと説く講師の熱の入った話があった。探鳥会が一般化してない証拠に大冊の小学館国語辞典を調べてみたら たんちょうの語句に丹頂 短調次には断腸と続くと笑っておられた。帰宅して私は早速小学館新選国語辞典(新版昭57年)を引いてみた。

短調の次に立派に 探鳥 という語句は見つかったので安心した。本屋でみた岩波、角川の同型の国語辞典には講師の云う通りであった。少々がっかりした。

◎神宮探鳥会では野鳥の好む木の実のエゴノキ、ムクノキ或は樹上性の青松虫、ジョロウグモの生態などいろいろと教わった。今樹木図鑑、自然観察ガイド、雑木林の四季を手にしながら今まで何気なく読みすごしていた記事を懸命に頭に詰めこんでいる。改めて知ることの喜びを誰かに分けてやりたい気持である。

◎楽しい懇親会の中で恒例のオークションがあった。収益は三宅島救援資金にするという前おきで多くの善意がよせられた。終盤近くなって糸魚川の伊藤さん、新潟の石部さんコンビのすばらしい演技には盛んな拍手が湧き最も多いカンパが入れられた。各支部から参加した多くの会員の心にこの日の出来事がほのぼのと思い出されるに違いない感激の一コマがあった。

◎探鳥会におけるリーダーの基本的姿勢はどうあるべきか。鳥を教える時代のウエイトは相対的に下ってきた時代に、初めての人には鳥と自然とに接しての満足感、よかったと言って帰る人に第一印象はそれ程強い。楽しく運営し、楽しいものとするにつきるのでないか。その通りだと思う。それにしても苦しい反面楽しかった3日間の講座であった。

黒埼町の野鳥

小池重人

今年の4月に西蒲原郡の黒埼中学校へ転勤し、科学部の指導で付近へ鳥の調査を行いました。この町は鳥が棲むのにそれ程良い環境ではないのですが、信濃川の下流域の鳥の様子を知るだけでも良いと思いとめてみました。調査場所は、黒埼町大野の町並と、中ノ口川と信濃川の合流付近です。町部には国道8号線が通っています。また旧中央通りは商店街となっています。周辺部は新興住宅地となっていますが、まだ田畑が点在しています。一方、河川部では合流付近がかなり広い川原となっており、大部分がアシ原や田の湿地です。一部にはヤナギなどの低木、ケヤキ・サクラなどの大木もあります。

この調査は主に4月から7月にかけてのもので、30種が確認されました。これをこの地の利用の仕方ですらに分けて説明します。

1. 冬鳥あるいは通過鳥……カイツブリ、ササゴイ、タシギ、ユリカモメ、ウミネコ、ツグミ、カンラダカの7種で、ユリカモメは春に普通に見られました。

2. 調査地内では繁殖していないが、どこかそれ程遠くない場所で繁殖しており、時折姿を見せるもの……ゴイサギ、コサギ、トビ、コチドリ、コアシサシ、ハシブトガラスの6種で、ゴイサギは5月21日に、最大51羽の群を観察しました。

3. 調査地内で繁殖するもの、または充分繁殖の可能性のあるもの、……キジバト、ハクセキレイなど17種が観察されました。これについてはもう少し詳しく述べたいと思います。

17種のうち、カルガモ、イソシギ、ヒバリ、セグロセキレイ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ハシボソガラスの7種は、川のみで繁殖していると思われます。それに、川だけで観察さ

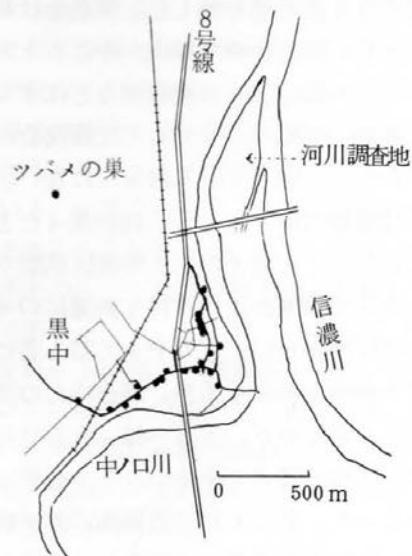
れ町部では見られませんでした。これはおそらく、川特有な環境、例えば草地やアシ原などで営巣することによるものと思われます。

キジバト、カッコウ、ヒヨドリ、モズ、オナガの5種は川と町の両方で繁殖していると思われます。カッコウはともかく全て低木で営巣する鳥です。これは川の低木のヤブや人家の庭木などで営巣が可能なことによるものだと思います。

後のツバメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリは、町部のみで営巣した鳥で、カワラヒワが庭の松の樹上で営巣した他は全て営巣場所を住居に依存しています。しかしその利用の仕方は種類によってさまざま、例えばツバメについて詳しく調べた結果、国道8号線の自動車の交通量が激しい道ぞいやただの住宅地には全く営巣せず、むしろ人通りの多い旧中央通りの商店街に21巣が営巣していることがわかりました(図-1)。

このように黒埼町の鳥たちは、川や町並のさまざまな場所を、営巣や採食のために、それぞれがさまざまな形で利用して生活していることがわかりました。

図-1 調査地とツバメの営巣状況



ハマヒバリの観察

古川 弘明
山本 明

’83.2.20 (日)曇時々小雪の舞う日、

ガンカモ一斉調査(第2回)で古川が朝日池に行った帰り、直江津港に立寄った。ここは昨年冬ハマシギが越冬したところである。今年も珍客が来ていないかなと、こちらに来る毎に立ち寄っている。この冬は小雪だったので港内に積雪はなかった。砂浜や港内の荒地などを探していると、双眼鏡に白っぽい小鳥が入ってきた。ユキホオジロと直感的に思った。しかしもう1羽見なれない鳥が側にいる。その顔を見たとき「あっ!ハマヒバリでは!!」と思い急いで図鑑をめくって確かめた。ユキホオジロにはこれまで何回かお目にかかっているが、ハマヒバリと出あったのは初めてだ。しかもユキホオジロと一緒に胸をワクワクさせながらしばらく見入った。

ユキホオジロは冬の冬羽であったが、ハマヒバリの方は羽色からは♀がわからない。ハマヒバリは伏せたような姿勢で、盛んに地面をついばんでいた。しばらく観察してその場所を離れた。

このハマヒバリはその後3週間程直江津港に滞留した。(終認は常山氏の3月13日)。後になってユキホオジロと別行動をとったが、大体は一緒に行動していた。違った科の鳥であるのに、面白い現象と思った。「野鳥」本年5月号(No.440)によると、’83年1月9日に島根県美保関町でハマヒバリ1とユキホオジロ8の混群(ユキホオジロは2~

3群に分かれている)が観察されているので、もしかするとそのハマヒバリが1羽のユキホオジロと共に北上してきたのかも知れない。

ところでハマヒバリはヒバリ科ハマヒバリ属で、アジアでは中央シベリヤからモンゴル、中央アジアの一部、東シベリヤの北極海沿岸、ヨーロッパではスカンジナビア半島からソビエト西部のバレンツ海沿岸で繁殖し冬期は南に移動する。日本には稀な冬鳥として渡来、本県でも’67年12月~’68年1月に新潟市で観察されているだけである。

ハマヒバリの滞留中4~5回行って観察し写真に記録した。観察の結果主な形態と行動は次のようであった。

- (1) ハマヒバリの腰はこげ茶色、嘴の先が黒く基部は灰色、黒い胸輪の下は白地に黒く小さい縦斑(図鑑にはない)があった。
- (2) 主として地面から採餌していたが、雑草の枯れたものから種子もついばんでいた。
- (3) 頭部の左右の冠羽はたまにしか立てない。
- (4) ユキホオジロより警戒心は強いが、先に飛び立ったり降りたりするのはユキホオジロの方で、ユキホオジロが行動をリードしているようであった。
- (5) 鳴き声は一度もきかれなかった。



直江津港にて (’83.2. 古川)

1983年 秋 シギ・チドリ 全国一斉調査結果

調査研究部
小野島 学

1. はじめに

本調査は、日本におけるシギ・チドリ類の渡来状況を把握するため、日本野鳥の会が全国の各支部に協力依頼し、全国一斉に実施したものである。調査は毎年春が4月27日、秋が9月15日と年2回行われ、今回は1983年9月15日に実施した調査結果についてその概要を報告する。

2. 調査地と方法

調査地は、海岸、河川、湖沼等例年シギ・チドリ類の渡来数の多い地域を中心に28か所を調査した(表1)

調査対象種はシギ・チドリ類で、ロードサイドカウント法及び定点カウント法により確認された種及び個体数を調査用紙に記入し、調査地の環境も併せて調査した。

3. 結果

今回観察されたのは17種871羽で、優占種は①トウネン(32.7%)②ケリ(21.8%)③ミユビシギ(20.6%)④シロチドリ(6.1%)⑤キアツシギ(6.0%)の順で、特に多数で群を形成して観察された種がそのほとんどである。その中でケリは大河津分水で190羽の群が観察され、本県の秋から冬に観察される水田、河川地帯のシギ・チドリ類の代表種といえる。海岸地帯ではトウネン、ミユビシギの観察が多く日本海側の渡りの中心種といえる。

4. おわりに

本調査の全国集計については、Strix(日本野鳥の会研究誌)Vol. 2に掲載されるので一読をおすすめる。

最後に調査を担当された各氏に対し、その御苦労に謝意を表します。

表1. 1983. 秋 シギ・チドリ類全国

| No. | 調査地 | | | 地区リーダー (調査人員) | タマシギ | ミヤコドリ | イカルチドリ | シロチドリ | メダイチドリ | |
|-----|------|----------------|------------|------------------|---------|-------|--------|-------|--------|----|
| | 市町村 | 地区 | 状況 保護区等 | | | | | | | |
| 1 | 中条町 | 桃崎浜 ~荒川河口 | 海岸 | 無 | 吉川吉枝(1) | | | 1 | | |
| 2 | " | 村松浜 | 海岸 | 無 | 宮越一俊(1) | | | | | |
| 3 | 柴田町 | 藤塚浜 | 海岸 | 無 | " (1) | | | | 3 | |
| 4 | 聖籠町 | 次第浜 ~納代浜 | 海岸 | 無 | 吉川吉枝(1) | | | 11 | 6 | |
| 5 | 豊栄市 | 福島潟 | 湖沼 | 保 | 小野島学(2) | | | | | |
| 6 | 新潟市 | 大夫浜 | 海岸 | 保 | 本間隆平(1) | | | 2 | | |
| 7 | " | 阿賀野川 河口 | 海岸 | 保 | 白井康夫(1) | | | | | |
| 8 | " | 鳥屋野潟 | 湖沼 | 保 | 高橋秀恵(1) | | | | | |
| 9 | " | 小針浜 | 海岸 | 保 | 小池重人(1) | | | 16 | | |
| 10 | " | 五十嵐浜 | 海岸 | 保 | 千葉 晃(1) | | | 1 | 2 | |
| 11 | 巻 町 | 四ノ郷屋浜 | 海岸 | 保 | 高橋正良(1) | | | 1 | 2 | |
| 12 | 新潟市 | 佐潟 御手洗潟 | 湖沼 | 保 | 高辻 洋(1) | | 1 | | | |
| 13 | 巻 町 | 越前浜 ~角田浜 | 海岸 | 保 | 風間辰夫(1) | | | 6 | | |
| 14 | 中之島村 | 与板橋 (信濃川) | 河川 | 無 | 渡辺弘雄(1) | | | | | |
| 15 | 分水町 | 大河津分水 (信濃川) | 河川 | 無 | 高綱 勉(1) | | | | | |
| 16 | 寺泊町 | 分水河口 (信濃川) | 河口 海岸 | 無 | 渡辺弘雄(1) | | | | | |
| 17 | 長岡市 | ハス田 | 水田 | 無 | 高綱 勉(1) | | | | | |
| 18 | " | 長岡大橋 (信濃川) | 河川 | 無 | 太田 実(1) | | | | | |
| 19 | 小千谷市 | 旭橋 (信濃川) | 河川 | 無 | 中山正則(1) | | 1 | 5 | | |
| 20 | 六日町 | 魚野川 | 河川 | 無 | 木下 弘(1) | | 4 | 6 | | |
| 21 | 小出町 | 魚野川 | 河川 | 無 | 柳瀬昭彦(2) | | 2 | | | |
| 22 | 西山町 | 石地 | 海岸 | 無 | 小林成光(4) | | | | | |
| 23 | 柏崎市 | 荒浜 | 海岸 | 無 | " (4) | | | 15 | 1 | |
| 24 | " | 西中通・ 北鯖石 | 水田 | 無 | " (4) | | | | | |
| 25 | " | 柏崎港 | 海岸 | 保 | " (4) | | | | | |
| 26 | 大潟町 | 朝日池・ 鶴ノ池 | 湖沼 | 保 | 山本 明(2) | | | | | |
| 27 | 上越市 | 直江津海岸 | 海岸 | 保 | 古川 弘(2) | | | | | |
| 28 | 糸魚川市 | 姫川河口 | 河口 | 無 | 伊藤卓夫(1) | | | | | |
| | 計 | 28か所 | | | 述べ44人 | | 8 | 11 | 53 | 14 |

一斉調査 (新潟県支部)

【1983年9月15日】

日本野鳥の会新潟県支部

| ムナグロ | ダイゼン | ケゲリ | キヨウジョウシギ | トウネン | ヒバリシギ | オジロトウネン | ウズラシギ | ハマシギ | サルハマシギ | コオバシギ | オバシギ | ミュビシギ | ヘラシギ | エリマキシギ | キリアイ | ツルシギ | アカアシシギ | アオアシシギ | クサシギ | タカブシギ | キアシシギ | イソシギ | ソリハシギ | オグロシギ | オオソリハシギ | ダイシャクシギ | ホウロクシギ | チュウシャクシギ | コシャクシギ | ヤマシギ | タシギ | セイタカシギ | ハイロヒメシギ | ツバメチドリ | オオシギ | シギ | 合計 | 種数 | | | |
|------|------|-----|----------|------|-------|---------|-------|------|--------|-------|------|-------|------|--------|------|------|--------|--------|------|-------|-------|------|-------|-------|---------|---------|--------|----------|--------|------|-----|--------|---------|--------|------|----|-----|-----|-----|----|---|
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 2 | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | |
| | | | | 34 | | | | | | | | 3 | | | | | | | | | 8 | | | | | | | | | | | | | | | | | 48 | 4 | | |
| | | | 5 | 103 | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | 13 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | 142 | 7 | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | 0 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 2 | |
| 7 | | | | 26 | | | | | | | 13 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 47 | 4 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | 0 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 18 | 3 | |
| | | | | 2 | 11 | | | | | | | 76 | | | | | | | | | | 8 | | | | | | | | | | | | | | | | | 100 | 6 | |
| 2 | | | | 73 | | | | | | 1 | 75 | | | | | | | | | | | 12 | | | | | | | | | | | | | | | | | 166 | 7 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 2 | |
| | | | | 31 | | | | | | | 26 | | | | | | 1 | 1 | 8 | 1 | | | | | | | | 9 | | | | | | | | | | | 88 | 8 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | 0 | |
| | | | 190 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 191 | 2 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 1 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | 0 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | 0 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | 11 | 4 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 11 | 3 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 2 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 0 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 17 | 3 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | 0 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | 0 | |
| | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 5 | 3 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0 | 0 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 13 | 13 | 1 |
| 9 | 190 | | 7 | 230 | | | 2 | | 14 | 180 | | | | | | | 4 | 3 | 2 | 52 | 20 | | | | | | 9 | | | | | | | | | 18 | 871 | 17 | | | |

注) 保: 鳥獣保護区 (保: 一部鳥獣保護区 無: 無指定 (一般野野) 鹵: 一部銃猟禁止区域 [禁無断転載])

魚野川の冬鳥たち

小 沢 文 雄

はく息が、だいぶ白く感じられるようになった10月、魚野川にある中州を訪れた。そこは昨年、洪水で何ヶ所も池ができ、ススキ、ヤナギがたちならぶ。もう、そこここに冬の鳥たちが集まっていた。四〜五百メートルはあるだろうか散策してみた。ススキの枯穂をかきわけ行くたび、地面でエサをとっているホオジロや同じ仲間のカシラダカがあわてて飛び散っていった。すっかり葉の落ちたヤナギの枝にはシジュウカラが、からむようにエサをあさっているのがみえる。山の斜面から流れ出る細い小川。大きな川に合流するその場所、「いた、カワセミだ」、私は反射的に地面にふせた。ゆれるガマの穂に、キラキラした水面をみつめていた。頭上から短かい尾にかけ青い美しい色は、秋のなごりをうつしてか、とりわけ青く輝いていた。フッと枝から消えたカワセミは、清流から銀のしぶぎと魚をとらえ、上流へすいこまれていった。せせらぎの川音とエサをついばむセグロセキレイの声が残っていたが、セグロセキレイは三羽つれだち残り少ない陽の日のためか、いそがしい川の流れのためか、これもせわしくエサをついばんでいるのが気にかかる。この季節は、鳥にとっても生きることに懸命ないそぐ時期なのであろうか。中州にたつて想いにふける間にも、さっきのこの地の住人カワセミが、するどい声をあげながら行き来する。川の上手のやぶにはウグイスが、にぶい音をたて、カシラダカにまじり、アオジ、カワラヒワの声もする。ツグミの群が高空を越えていった。その時、ふと聞きなれない声ははいてきた。活発に動くその姿を双眼鏡でとらえた。「ベニマシコだ」はじめて見る胸の赤はとても印象的で心が高なるのを覚えた。こんな出会いが私はうれしい。終えて土手にあがり、冬鳥たちの中州をあとにした。

雨飾山探鳥会

伊 藤 卓 夫

6月4〜5日に参加者8名で梶山新湯温泉を宿に雨飾山往復の探鳥会が行われた。4日午後5時に糸魚川駅前より車2台で登山道の始まる根知梶山まで行き下車した。そこで間もなく一行を歓迎する様にサンバ、ハチクマが同時に上空50mほどを横切った。

標高約400mの梶山より約900mの温泉までは低山帯に生息するキビタキ、アオジ、ヤブサメ等の罫入り前の囀りが次々に流れて来た。夜7時に温泉に到着し、屋内とその名も「都忘れの湯」の露天風呂へ好みに分れて汗を流した後、「コノハズクを聞く会」として和気あいあいの一時を過ごした。はじめは温泉の照明用の発電機の音で聞こえなかったが、それがやんだ後の10時半、コノハズクの声が聞こえるようになった。しかし遠くではっきりせず、「心に感ずる声」とは佐藤弘さんの弁であった。

5日3時半起床、有志6名で山頂目指し、探鳥登山に出発。温泉からは段丘状の登りで平坦になると小休止してはオオルリ、クロジ、ジュウイチ等の声に耳を傾けた。7時中ノ池着、この小さな池は全国数ヶ所にしか棲息しない淡水貝「フクイマメシジミ」が住むことで有名である。中ノ池からは約45°、長さ300m以上の雪渓が続ぎ、ルート一番の急登坂。スリッパしない様注意して登る。周りには亜高山帯の鳥、カヤクグリ、ルリビタキが多い。笹平を過ぎ、山頂直下に咲くカタクリ、シラネアオイ、ハクサンイチゲ等をしばし観賞。8時山頂着、上信越高原、中部山岳と両国立公園を眺めながらの朝食は最高であった。

1,963mの山頂周辺に一番(つかい)ながらライチョウが生息、繁殖していた。

9時半下山開始、途中、筍とフキを取り、全員無事に下山。2日間好天に恵まれ、楽しい探鳥会であった。ミソサザイ、ビンズイ、ホシガラス、ウソ、ゴジュウカラ、クマタカ、ノスリ等13種の野鳥を確認した。

晩秋の街かどで

石 部 久

晩秋の白い朝もやの庭に小さな野の鳥メジロがきた。初秋から、うす紫になりはじめ、今熟したムラサキシキブの実を、今日も三羽でつれだち息をひそめ、ついばんでいた。二日前まで、ウグイスも遠慮しながらカリンやボケ、ウメモドキの幹に小さな虫を探していた。三年前から新潟市の内野町にすみ、草もはえていない砂地に、ピラカンサス、ネズミモチ、ウメモドキ、ムラサキシキブなどの小さな苗木を買い植え、大きく育ち、実をつける秋を楽しみに待っていたのである。昨年まで、スズメの他は顔をみせなかったここに、今年は、シジュウカラ、ルリビタキ、ハクセキレイ、ジョウビタキ、ヒヨドリ、ツグミ他多くの野の鳥たちの訪問をうけるようになった小さな庭は、まだ一種が、三日も通えば、それが食する種のエサもなくなるのである。この新潟市内に各種の鳥が多く身近に見られるようになるのは、この秋である。これら多くの野の鳥たちは、スズメやカラス、ムクドリのような、めだつた動きはせず、木や葉、土のように、その姿をその場にとけ込ませ、影になりエサを探し、ひっそりと生活している。決して情報過多な社会に、ゆとりの中で生活する人の目には、つくはずもない。まもなくこの街—新潟—に白い雪がおりてくるだろう。かよう学校のそばの鳥屋野にも、もう多くの鳥たちが湖面に群れ集まっている。はげしい北からの風に乗る、千島、カムチャッカより、二メートルもの翼を広げ、オジロワシなども姿を時折見せるといふこの地は、鳥たち、生きる生物たちにとって何なのだろう。季節を追いかけ懸命に生きる野の鳥たち。季節に追いまわされ、日々を、ため息まじりにおくる我が身の生活を省みるとき、生きる美しさ、姿に少し問題があるようだ。新潟市に来て、野の鳥127種に出あった。

支部報によせて

「新潟県野鳥愛護会

ガンカモ調査に同行して」

高 橋 小夜子
高 橋 正 良

去る11月13日、新潟県野鳥愛護会がガンカモ科鳥類の生息状況調査を実施した。その調査地の一つである鳥屋野潟で調査に同行した。

当日の天候は雨。カルガモ、マガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ハンビロカモ、ビドリガモ、オナガガモ、ヨシガモ等11,000羽が観察された。カモ類の報告については愛護会の会報で行われるので、ここではカイツブリ類について報告したい。

当日鳥屋野潟では上記のほかにかイツブリ、ハジロカイツブリ、ミミカイツブリ、カンムリカイツブリが観察された。

特に、ミミカイツブリは一羽だったが20倍のフィールドスコープでもはっきりと見られた。ミミカイツブリはハジロカイツブリとの識別が難しいが、この時は以下に引用するような特徴がよく見られた。

高野伸二氏によると、「冬羽では頭上から背は黒褐色、頬、前頸、胸、腹は白いが、上頸部はやや褐色をおびる。脇には黒褐色の斑がある。」又、ハジロカイツブリとの相違は「ハジロカイツブリのくちばしはそっているが本種ではまっすぐなこと、冬羽ではハジロカイツブリの頭上の黒褐色の部分は、目の下にまで達しているのに、本種では頬から前頸にかけて白いことで見分けられる。」

(日本産鳥類図鑑：東海大学出版)

又、RSPB (イギリス野鳥の会) 監修の図鑑では、ハジロカイツブリとの違いは次のようになっている。

Slavonian sp has lower forehead, pale spot, with black passing through eye.

And distinguished by uptilted bill and area of black on head

(The Mitchell

Beazley Birdwatchers Pocket Guide: Peter Hayman :RSPB)

しかし、日本の種とは違うらしく、どうも亜種らしい。読者の方々ご意見をお寄せ下さい。

印象としては、全体が白っぽい感じがしたことと丸いことであった。

カンムリカイツブリは11月6日の探鳥会では同時に8羽が観察された。13日には5羽であった。関東では狭山湖で60倍の望遠鏡でやっと確認できた思い出があり、新潟でかなり近距離で観察できることが夢のようである。

以上簡単であるが報告を終わる。

2月探鳥会のお知らせ

新潟県全域に、本格的な雪だよりが聞かれ生きるものすべてのものたちに厳しい季節が始まっています。

冬の日本海海岸探鳥会として寺泊においてこの季節生息する、カモメ科やガンカモ科、カイツブリ科等の鳥類を観察します。

荒波のなかに浮き沈みするクロガモ群を寒風に凍えた手で望遠鏡の視野に捕え、気が遠くなるカモメ科の識別など、厳しさと不安と楽しさが、いっぱい寺泊に出かけてみませんか。でかける前に、海鳥を見るのは、初めてという方、ものすごく寒いです。寒さに対する準備だけは決して忘れずに。他に、カモメ科は6種ぐらいみられます。出かける前に海ガモと、カモメについて図鑑等で調べておくと一層楽しいにちがありません。

記

| | |
|-------------------------|--|
| 期日 | 昭和59年2月5日(日) |
| 場所 | 寺泊海岸・港 (集合) 三島郡寺泊町、町立体育館 2階研修室 |
| 時間 | 午前10時 説明会(研修室にて) 10時30分 現地へ(寺泊港) 午後12時30分 研修室にて昼食 13時10分 研修 |
| | ☆ 冬期日本海海岸冬鳥について ☆ その他 |
| 経費 | 1人200円(資料、茶菓子等) 小学生以下不 |
| 不明・問い合わせ等は事務局か渡辺弘雄さんまで。 | 渡辺弘雄さん TEL 025872-3065 三島郡与板町大字与板乙5948-2 |

☆毎年この海鳥探鳥会では、渡辺弘雄さん達から、現地調査から、研修室手配まで何から何までやってもらっています。感謝します。

おねがい

- 各地の鳥だよりや、生態写真、記録など、事務局までお寄せ下さい。
- フィールドガイド「日本の野鳥」高野伸二著は、野鳥観察の必読必携書です。(会員割引有)
- ☆○会費やカンパは遠慮なくどしどしお送り下さい。大歓迎です。振替 新潟 1-6002
- 会員名簿に、まちがい等ありましたら、おゆるし下さい。次になおします。

支部報について

- たいへんおそくなってしまいました。たくさんの方から書いていただき、本当に執筆者の方、感謝いたします。
- 今回から「野鳥の生物学」講座を上越教育大学、中村登流先生におねがいし、こころよくおひきうけ下さいました。今後も楽しみにお待ち下さい。「越後の山シリーズ」初めは、渡部通さんから研究の飯豊山を書きいただきました。次回は、越後三山です。
- 吉川吉枝さんが会員名簿をまとめて下さいました。新潟県支部も、ようやく240名ちかくなりました。これからもどンドン野鳥や野人と友だちになりたい方、おさそいください。

テープで聞く新潟県の野鳥制作中

県支部では、新聞記事にもあったように、会員、伊藤卓夫(糸魚川)さんを中心に「声できく野鳥のさえずり」(仮名)を制作中です。夜もねずに、寒風吹きすさぶ糸魚川の夜を、テープ作りに奮闘中です。(参考 35才独身)

県下各地の鳥だよりが聞こえるなか、会員による活躍も新聞、テレビ等で報道されています。これからも鳥たちのため、次世代の生きる大地のため、活躍をお祈りいたします。

水鳥も住みよいヨ

大群が羽を休める 野鳥の会がアシ刈り池造り



出陣の鳥、朝早くから飛び出た

野田あきたの山原と輝は新潟市野鳥公園に冬、水鳥がしを数倍せしむ野鳥の会メンバーが鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。野鳥の会が鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。野鳥の会が鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。野鳥の会が鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。

天国鳥地獄



今年より鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。野鳥の会が鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。

分の一ほどの鳥の群れを知り、野鳥の会が鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。野鳥の会が鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。

恐怖の目玉板だゾ

高田城跡公園でウソ追放作戦

鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。野鳥の会が鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。

目玉板、や白色板を取り付け、野鳥の会が鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。野鳥の会が鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。

テープで野鳥と 触れ合いを



野鳥の会が鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。野鳥の会が鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。

64種の声 販売を計画

「野鳥の活動資金ねん出に

野鳥の会が鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。野鳥の会が鳥をせじかつかつを知り、池を造り、水鳥を誘引する。

発行 昭和59年1月15日
発行所 日本野鳥の会新潟県支部
〒950-21 新潟県新潟市五十嵐三の町 9753 番地
電話 0252(61)1416 石部 久 振替 新潟1-6002